

幼児におけるコミュニケーションを文脈とする行為の原因帰属

九州大学大学院 石川 勝彦

Child's causal attribution of action embedded in social communication

Graduate school of Kyushu University ISHIKAWA, Katsuhiko

要約

他者の行為の意味を同定するプロセスには、他者の行為意図を推測する側面だけでなく、行為の原因を帰属する側面も含まれる。行為選択に先立って、相互作用する他者からなんらかの働きかけがあった場合には、行為は行為者の自発的な選択であるだけでなく、他者からの社会的影響力によって駆動されている可能性が高まる。本研究は、行為に先立って他者から働きかけを受けた行為の原因を、どのような場合に内的ないし外的要因に帰属するか検討した。実験では伝達の情報意図が被験者に示される場合と示されない場合を比較した。実験の結果、刺激内の人物たちがやりとりするメッセージが被験者に示されない場合にのみ、他者からの働きかけの影響が強く検出される傾向にあることが示された。こうした外的帰属を重視する傾向は5歳にはみられず、6歳にかけて発達する可能性が示唆された。

【キー・ワード】 行為, 原因帰属, コミュニケーション

Abstract

On identifying the meaning of other's action, we not only do it through inferring the intention of an actor but also attributing the cause of the action to dispositional factor, or situational or social factor. In the case in which a target action follows the communication with another person, it might be valid to attribute the cause of the action to the social impact of the preceding communication. The present research aimed to investigate whether 5 and 6-year-olds attributed the cause of the action to a disposition or social influence from communicative partner under such situations. As results of experiments, adults and 6-year-olds attributed the cause of the action to social transmission from sender only in the condition in which participants were not let to know what sender said to receiver. This tendency did not appear in the age of 5-year-olds, but appeared in adults and 6-year-olds.

【Key words】 action, causal attribution, communication

はじめに

コミュニケーションには「メッセージが受け手に到達したか」「受け手が送り手の意図どおりにメッセージを理解したか」「送り手の意図した影響が受け手において実現するか」など、様々な次元に不確実性が潜伏する（ルーマン，1993）。コミュニケーションの意味は送信者のねらいや送信者がこめた意図どおりに受け手に解釈されるとは限らない。

スペルベルとウィルソン（2000）は、言語的伝達とは受信者の認知環境を操作することである、と述べている。つまり言語を用いてコミュニケーションを行うことは、話し手が聞き手に対して、話し手が意図した認知的なインパクトを与えようとすることである。しかしながら第三者的視点からみると、他者の認知環境を直接観察することはできないわけなので、他人の行動が、その他の人々とのコミュニケーションの影響を受けているのか、それとも行為者本人の意思や意図から発したものであるかは決め難いはずだ。ところが普段の生活の中で私たちはこうした状況で困難をほとんど感じることなく、他人の行動が伝達の影響をうけているかどうかを判断しているように感じる。なぜこのようなことが可能なのだろうか。おそらく行動がどのような要因からどのような影響を受けているのかを評価する認知処理機構をひとが備えているからである。

これまで行われてきた行動の原因推論の研究では、行動の原因が行為者の特性に帰属される条件、状況の制約や望ましさなどの社会的要因に帰属される条件が探求され、理論的・実証的な知見が成人を対象に蓄積されてきた（Kelly, 1967 ; Jones & Davis, 1965 ; Gilbert & Malone, 1995 ; Strickland, 1958）。

一方幼児を対象に行われてきた原因帰属の研究に目を移してみると、研究の蓄積は乏しいのが現状である。これまで行われてきたところでは、あらかじめ行為者の特性に関する情報を幼児に与えておき、特性に関する情報を演繹的に用いる能力の発達が検討されてきた。具体的には3-4歳から特性に関する情報を適切に理解・評価して、幼児自身の学習に役立てることができることを見出されている（Birch, Vauthier, & Bloom, 2008 ; Einav & Robinson, 2010 ; Koenig, Clement, & Harris, 2004 ; Koenig & Woodward, 2010 ; Nurmsoo & Robinson, 2009 ; Robinson & Nurmsoo, 2009）。

例外的に Einav & Robinson（2011）は、特性／伝達を切り分ける能力の発達を調査している。実験では二人のインフォーマントが共に妥当な情報を提供するのだが、一方は誰にも頼らず自力で妥当な情報を提供するのに対し、他方のインフォーマントはさらに別のインフォーマントから情報を提供されることによって他力的にしか妥当な情報を提供できないという場面を幼児にみせる。どちらのインフォーマントを信頼するかについて、4歳から前者を選択するという結果が示された。4歳からこうした伝達の影響を適切に考慮することが示されている。

ところが Einave ら（2011）の研究も、コミュニケーションの曖昧さについては主題として取り扱っていない。インフォーマントが受容するコミュニケーションについては、その情理的援助の影響は確実であることが前提となっており、あくまで特性に関する情報を利用する能力を検討した研究ラインに属すると考えられる。そこで本研究では曖昧さを含んだ他者からのコミュニケーションが、コミュニケーションを受信した行為者に与える影響を幼児がどのように評価するのかを検討する。具体的

には、他者から情報提供を受けたのち受信者が行為選択を行う場面に對し、当該行為が情報提供の影響を受けていると判断する傾向の発達的变化を検討する。実験では先行するコミュニケーションの曖昧さを操作した。ひとつの条件では先行する伝達の内容が被験者にも示される条件、もう一方の条件では伝達の内容が被験者には知らされない条件を用いた。幼児期の後期から伝達の曖昧性の検出が可能となるとの知見があることから (Plumert, 1996; Revelle, Wellman & Karabenick, 1985 ; Patterson, Cosgrove & O' Brien, 1980 ; Matthews, Lieven, Thakston & Tomasello, 2006; Nadig & Sedivy, 2002; Nilsen & Graham, 2009; O' Neill, 1996), 本研究では 5-6 歳を対象とした。

方 法

被験者

成人女性 53 名 (平均年齢 : 19.47 歳), 6 歳児 18 名 (平均年齢 6 歳 2 カ月 (SD=2.8 カ月), 男児 10 名, 女児 8 名), 5 歳児 15 名 (平均年齢 5 歳 5 カ月 (SD=5.6 カ月), 男児 8 名, 女児 7 名) が参加した。

実験刺激・条件

被験者は 4 種類のビデオを視聴した。ビデオは二人の女性 (送信者と受信者) が、ひとつの既知物 (くまのぬいぐるみ, ぼうし, アンパンマンのぬいぐるみ, かさ) の置かれた机の後ろに座りカメラを直視する場面から始まった。送信者が受信者の方を振り向くと少し遅れて受信者の女性が送信者の方を向き二人はアイコンタクトをとった。「言語伝達試行」では、そのまま送信者は既知物を指差しながら名称をラベリングした。ラベルを聞いたところで受信者は送信者に対し 2 度頷きを示した。二人はほぼ同時に再びカメラを向き直り、受信者は送信者が名づけた名称をカメラに向かってラベリングした。「正答条件」では送信者・受信者ともに正しい名称をラベリングした。「誤答条件」では、送信者・受信者ともに誤った名称をラベリングした。残りの 2 試行は「みみうちジェスチャー試行」である。アイコンタクトをとるところまでは言語伝達試行と同一だが、その後送信者が受信者の耳元に接近し耳打ちのジェスチャー (口元に手をあてる) を示しながら口をパクパク動かした。重要なことだが実際には音声を発しておらず、被験者には何も聞こえない。受信者は耳打ちに応じるように頭部を送信者側に傾けた。約 1 秒後送信者は頷きを示し、「正答条件」では受信者が正しい名称をカメラに向かってラベリングし、「誤答条件」では誤った名称をラベリングした。

刺激では送信者が受信者にメッセージを伝達し、受信者がこれを受信、理解、承認しているようにみせるため受信者に grounding behavior (GB) を産出させている。Clark (1996) は会話を共同活動ととらえ、話し手発話を聞き手が受理することを示す行動が適切に産出されることが、会話の参加者の間に共通理解 common ground が成立していることの証拠となると述べている。common ground の基準は「話し手が意味したことを聞き手が現行の目的に照らして十分理解している」ことを話し手と聞き手が相互に信じる、ことである (Clerk & Brennan, 1991)。こうした相互信念が成立してい

ることの証拠として機能する聞き手の行動が GB である。具体的には継続的注意、あいづちや頷き、適切な時発話の開始、が含まれる（高梨・瀬戸口・坊農・河原，2007）。本刺激では送信者のラベリングの直後に受信者が示す行動が GB として機能していると想定している。受信者は送信者のラベリングをアイコンタクトしながら聴取し（継続的注意）、ラベリング終了直後にあいづちを産出した。

手続き

成人の調査は大学の授業を利用して行った。解答用紙を配布後、「これから二人の人物がやり取りしながら、物体の名称を言い当てている映像を流します」と教示してから、教室前部のスクリーンにパワーポイントを用いて動画を映写した。スクリーンの上半分に刺激映像を提示し、その直下にターゲット質問の選択肢として、送信者、受信者、両者、が映った 3 枚の静止画を並べた。映像が終了したところで、正答条件では「どの人物が正しい名前を知っていたと思いますか」、誤答条件では「どの人物が誤った名称をおぼえていたと思いますか」と目標質問を教示し、3 択から一つを選択し回答用紙に記入するよう求めた。

幼児実験は被験者の通う保育施設の静かな一室にて個別に調査した。刺激呈示はノート PC (Asus, U36S) からパワーポイントを用いて行った。ラポール形成を行った後ウォームアップ試行を行った。ウォームアップ試行では、「これから**ちゃん（くん）とクイズで遊びます。パソコンに出てきた絵の名前を当ててね」といって既知物のイラスト（アンパンマン・ドラえもんなど）を映写し名称を尋ねた。4 問に回答を求めたあと、「これからお姉さんができます。このお姉さんもクイズをやっています。お姉さんがクイズに正解するかどうかみていてね」と言って、2 種類の映像を呈示した。机の上に既知物が置いてあり、その後ろにひとりの女性がカメラを向いて座っている場面から映像が始まった。女性は既知物を指さしながら、ひとつの試行では正しいラベリング、もうひとつは誤ったラベリングを行った。被験児にラベルを復唱してもらった後、ラベルの正誤も確認した。その後登場人物は正答することも誤答することもあることを教示した。

本試行では成人に用いたものと同様の刺激を呈示した。言語伝達試行では送信者と受信者のラベリング内容を、みみうちジェスチャー試行では受信者のラベリング内容を復唱してもらった。その後ラベルの正誤を確認し、正答条件では「そうだね、このお姉さんたちは正解しました。どのお姉さんが正解知っていたと思う？」、誤答条件では「そうだね、このお姉さんたちは間違えました。どのお姉さんが間違えて名前をおぼえていたと思う？」と尋ね、パワーポイント下部に示されている送信者、受信者、両者、の 3 択から指さしによって一つを選ぶよう求めた。これを言語伝達試行、みみうちジェスチャー試行のそれぞれについて行った。

分析では年齢別・条件別に、各選択肢を選んだ人数を集計した。分析は言語伝達とみみうちジェスチャーという送信者からの伝達方法の違いに注目して行った。分析 1 では両試行の正答条件、分析 2 では両試行の誤答条件の結果を整理した。

作業仮説

言語伝達試行では 3 つの選択肢がどれもありうる。一見すると送信者が既知であることは確実にある

ようだがそうではない。送信者が偶然ラベルを言い当て、これを受信者が承認している、という解釈もありうるため、送信者（伝達に先立って送信者のみが既知で、受信者は伝達から学習した）、受信者（送信者のラベルを既知であった受信者が承認した）、両者（伝達に先立って二人とも知っていた）はどれも可能である。

一方みみうちジェスチャー試行では送信者の情報意図は被験者には示されていない。送信者の既知性も曖昧である。送信者が関連する内容、すなわちラベルを受信者に伝達したと想定した場合、送信者の既知性が仮定されたうえで、①受信者は送信者から学習した可能性（送信者が専一的に選択されるだろう）、②伝達は受信者にとって学習効果がなかったと仮定されれば受信者は既知であった可能性（両者が選択されるだろう）、の両者がありうる。さらに送信者は知らなかった、あるいは関連する内容が伝達されなかったと仮定した場合の③受信者への専一的な帰属、も妥当となる。

ただみみうちジェスチャー条件において伝達の内容が示されない分、曖昧性は増加していると考えることができる。

約言すれば、本実験は、伝達コミュニケーションにおいて伝達内容の明示性を操作することによって、伝達の効果に対する見積もりがどのように変化するかを検討した。具体的には受信者の回答の原因帰属（伝達に帰属される／受信者の特性に帰属される）が、行われた伝達の明示性（言語伝達／みみうちジェスチャー）によってどのように変化するのかを調査した。

分析 1 正答条件

正答条件の回答を対象に、年齢別・試行別に、送信者・受信者・両者のそれぞれを選択した被験者の度数を集計し（表 1）、度数の偏りを χ^2 検定によりテストした。

結果

成人は言語伝達試行では 36%が送信者、28%が受信者、36%が両者を選択し、これらはチャンスレベルにとどまった ($\chi^2(2)=.604$, $p=.739$)。みみうちジェスチャー試行では 59%が送信者を選択し、チャンスレベルより有意に高い比率だった ($\chi^2(2)=17.925$, $p=.000$)。加えて受信者選択がチャンスレベルより低く、両者の選択率はチャンスレベルだった。

6 歳は言語伝達試行では人数の偏りが有意傾向であった ($\chi^2(2)=5.33$, $p=.069$)。57%が受信者を選択しており、これは有意傾向であるがチャンスレベルより高かった。みみうちジェスチャー試行では 61%が送信者を有意に高い比率で選択し、受信者・両者が低い比率となった ($\chi^2(2)=6.33$, $p=.042$)。一方 5 歳は言語伝達試行では人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(2)=.40$, $p=.819$) が、みみうちジェスチャー試行では 60%が受信者を選択し、これは有意傾向だった ($\chi^2(2)=5.20$, $p=.074$)。加えて両者の比率が低かった。

考察

言語伝達試行では 3 つの選択肢が妥当でありえた。実験の結果、成人では 3 つの選択に優先性はみられなかった。同様にみみうちジェスチャー試行でも 3 つの選択肢がどれも妥当でありえた。実験の結果、受信者・両者選択が低くなり送信者帰属のみが有意となった。つまり受信者への既知性の想定が発現せず送信者への専一的な帰属が優勢となったといえる。

なぜみみうちジェスチャー試行において送信者選択が有意になったのだろうか。二人の登場人物の知識状態がともに曖昧である点は両試行に共通していた。違いは送信者の伝達内容の明示性であった。みみうちジェスチャー条件では送信者の情報意図を考慮する必要がなかったため、送信者の既知性を予断的に前提することが促進されたのではないか。

興味深いのは既知性がみみうちジェスチャーでは試行送信者に帰属された点にある。この判断は伝達コミュニケーションの機能、コミュニケーションが受信者に与えた影響を最大化する方向で形成されているように見える。受信者が正答を回答できたのは送信者からの伝達があって初めて可能となったとみなすときに、送信者の伝達は受信者の認知あるいは後続の行為に対し最大の影響を及ぼしているとみなすことができる。伝達の存在意義を最大化する方向に帰属推論が方向づけられていることが特徴であったのではないか。

6 歳の結果をみてみると、言語伝達試行では有意傾向ではあるが受信者帰属が優勢となった。最終的に正答を発話した人物に既知性を帰属しているという点では、原因帰属の推論バイアスとして頻繁に言及される対応バイアス (correspondence bias : 状況の制約に十分に注意が払われず状況と一貫した特性を付与するバイアス) (Jones & Davis, 1965) に近い反応がみられているように見える。一方みみうちジェスチャー試行では、送信者帰属が有意となり、受信者・両者の選択が抑制された。このことから、成人と同様伝達の影響を高く評価するバイアスが発現していると考えることができる。

5 歳でも、言語伝達試行では 6 歳と同様送信者帰属をみせた比率は低い水準にとどまった。一方みみうちジェスチャー試行では送信者帰属は生じなかった。したがって成人・6 歳でみられた伝達を重視するバイアスは微弱であり、こうした傾向は 5 歳から 6 歳にかけて発現する可能性が示唆される。

表 1 正答条件における各選択肢を選んだ人数 (比率)

	成人				6歳				5歳			
	言語伝達		みみうち		言語伝達		みみうち		言語伝達		みみうち	
送信者	19	(35.8)	31	(58.5)	2	(11.1)	11	(61.1)	4	(26.7)	4	(26.7)
受信者	15	(28.3)	6	(11.3)	10	(55.6)	4	(22.2)	6	(40.0)	9	(60.0)
両者	19	(35.8)	16	(30.2)	6	(33.3)	3	(16.7)	5	(33.3)	2	(13.3)

注) 数字は人数(比率)を表す

注) 試行ごとに、送信者・受信者・二人とも、の 3 水準の χ^2 検定を行った

分析 2 誤答条件

誤答条件では、正答条件において観察された傾向がリブレイクされるかどうかを検討するため受

信者が誤った回答を行うシーケンスに対し、既知性の帰属を回答者に求めた。またここではネガティブなパフォーマンスがアウトプットされるため一種のネガティブ・バイアスが働き、言語伝達条件においても送信者帰属が生じる可能性も想定している。

言語伝達試行では、送信者は誤った発話を行うため誤った知識をもっていると想定することに無理はないだろう。①受信者は既知であったが送信者のラベルを代弁しているとみなせば、送信者のみが選択される。②受信者も既知でなかったとみなせば両者を選択することになる。一方、送信者が誤ったラベルを行っているため受信者のみに誤りを帰属することは困難であるように思える。

みみうちジェスチャー試行では、情報意図の曖昧さゆえに送信者の知識状態も曖昧である。送信者が誤ったラベルを伝達したと想定した場合、言語伝達試行と同一の論理に則って①送信者、②両者、を選択する理由が生じる。一方送信者は正答を伝達した、あるいは関連する内容が発話されなかったと仮定すれば受信者が誤らなければならないため③受信者が選択されることになる。

分析 2 では、誤答条件の回答を対象として、年齢別・試行別に、送信者・受信者・両者、のそれぞれを選択した被験者の度数を集計し(表 2)、度数の偏りを χ^2 検定によりテストした結果を整理した。

結果と考察

成人では、言語伝達試行では人数の偏りが有意だった ($\chi^2_{(2)}=13.623$, $p<.001$)。56%が両者を選択しチャンスレベルより高かったのに対し、送信者は 26%、受信者は 17%となり、チャンスレベルより低かった。みみうちジェスチャー試行でも人数の偏りが有意だった ($\chi^2_{(2)}=13.736$, $p=.041$)。多重比較の結果、送信者が多く選択され、受信者がチャンスレベルより低い比率となった。

正答試行と同じく、言語伝達試行では送信者帰属が生じず、みみうちジェスチャー試行では送信者帰属が生じた。一方正答条件と異なっている点は両者帰属が生じていることである。この理由をデータから明らかにすることは困難であるが、受信者が誤るためには二人共ラベルを知らないことが必要である、という推論が働いているのかもしれない。またネガティブ・バイアスは検出されなかった。

6 歳では言語伝達試行は人数の偏りは有意にならなかった ($\chi^2_{(2)}=4.33$, $p=.115$)。みみうちジェスチャー試行では有意傾向を示し ($\chi^2_{(2)}=5.33$, $p=.069$)、送信者の比率が高く、両者の比率が低かった。5 歳では言語伝達試行では人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2_{(2)}=3.60$, $p=.165$)。一方みみうちジェスチャー試行では受信者の選択比率が高く、両者の選択比率が低かった ($\chi^2_{(2)}=8.40$, $p=.015$)。

6 歳は、有意性に多少の違いがあるが実数は正答条件の比率とほとんど同じだった。言語伝達試行においては送信者・両者を合わせて 50%となり、送信者を含む比率は半数であり、伝達の影響を仮定する推論を獲得しつつあるが、半数は受信者への帰属を行っており、伝達の影響ではなく行為者の内的特性に帰属する推論も発現しているようだった。みみうちジェスチャー試行では送信者が多く選ばれ、両条件において正答条件と同じ傾向だった。5 歳は言語伝達試行では 6 歳と同じ傾向を示した。みみうちジェスチャー試行でも正答条件と同じく送信者帰属は生じなかった。おおむね正答条件の結果がリプリケイトされたといえるだろう。

表 2 誤答条件における各選択肢を選んだ人数（比率）

	成人				6歳				5歳			
	言語伝達		みみうち		言語伝達		みみうち		言語伝達		みみうち	
送信者	14	(26.4)	29	(54.7)	2	(11.1)	10	(55.6)	2	(13.3)	4	(26.7)
受信者	9	(17.0)	7	(13.2)	9	(50.0)	6	(33.3)	8	(53.3)	10	(66.7)
両者	30	(56.6)	17	(32.1)	7	(38.9)	2	(11.1)	5	(33.3)	1	(6.7)

注)数字は人数(比率)を表す

注)試行ごとに、送信者・受信者・二人とも、の3水準の χ^2 検定を行った

総合考察

本研究はコミュニケーションが行われた場面を素材として、行為の原因を行為者本人の特性／他者からのコミュニケーションに帰属する推論が成人・5・6歳でどのように発現するか検討した。その結果、伝達の情報意図が被験者に知らされない条件で、6歳から行為の原因を行為者本人ではなく、先立って行われた伝達に帰属する推論が発現することが明らかになった。

成人・6歳ではみみうちジェスチャー試行において、直接ラベリング行動を行った受信者ではなく、伝達行動を示した送信者に既知性を帰属する推論をみせた。一方5歳では受信者=回答者本人に帰属される傾向が見出された。このことから、伝達が行われたのち回答者が行為を行ったとき伝達を原因と想定するバイアスは5歳から6歳にかけて発現することが示唆された。

重要な点はこうした推論は必ずしも自明ではないということである。どちらの試行でも伝達の影響はシークエンスの内部では不確実であった。言語伝達試行では顔きによって伝達の受理だけが示されており、受信者が伝達に先立って既知かどうかは示されていない。みみうちジェスチャー試行では伝達の内容は不明であるから送信者が関連性のある内容を伝達した保証はない。さらに仮に関連する内容が伝達されていたとしても、受信者が伝達に先立ってラベルを知っていたことを否定する根拠はシークエンス内にはなかった。

原因帰属では、行為者を取り巻く状況の要因など行動を制約する社会的な要因に対して十分な注意がはられず特性に帰属されやすい傾向が頻繁に観察され、しかも非常に頑健であるとされる (Ross, 1977 ; Jones & Daris, 1965)。しかしこうした帰属バイアスは文化普遍的ではないことも知られている。例えば日本人成人では、自己の成功を自己の能力に帰属するバイアス (Miller & Loss, 1975) は軽微であり、周囲の協力などの社会的要因への帰属が好まれる (Kashima & Triandis, 1986 ; Bond, Leung & Wan, 1982)。この例にみられるように条件によって特性への盲目的な帰属は抑制される。本調査の最も重要な発見は、幼児期から、特性への帰属を抑制し、社会的要因への帰属が可能であること示唆している点である。

ネガティブな結果が生じる際にはポジティブな結果が得られる状況とは異なった帰属、すなわち送信者にその責めを帰すようなバイアスが生じる可能性を想定し、実験では誤答条件を独立に設けた。しかし想定したネガティブ・バイアスは生じなかった。この理由を明らかにすることは今後の課題としたい。

すべての年齢群において、言語伝達試行、すなわち送信者の伝達内容が明示された場合、送信者帰属が生じなかった。なぜこうしたコントラストが生じたのだろうか。本研究のデータの範囲内でこの問いに回答することは困難だが、可能性を検討してみたい。

成人では、伝達の影響ではなく、受信者が正答／誤答に至るための論理的な要件が推論された可能性がある。言語伝達試行では送信者も回答を述べているため、送信者の既知性については手掛かりが与えられている。正答条件では、二人のうちどちらか一方が正答を知っていればよい、あるいは二人とも知っていてもよい、ということからランダムな選択となったかもしれない。誤答条件では二人とも誤っていれば誤答に至りうるので、両者が選択されたのかもしれない。一方みみうちジェスチャー試行では送信者の既知性については手掛かりが呈示されなかったため、論理的な要件に関する検討・推論が抑制され、伝達の影響が推論された可能性がある。

もうひとつはみみうちのジェスチャーが情報の「移送」をイメージさせやすかった可能性が考えられる。言語伝達試行では送信者もメッセージを明示しているため、受信者がこれをどのように聞き受けたかについて推論が生じたのではないか。送信者から学習した可能性、伝達に先立って既知であった可能性などが想起され、諸可能性から選択を行うための推論が駆動した可能性がある。一方みみうちジェスチャー試行では送信者の伝達内容が明示されていないため、情報が受信者に受理されて被験者に受け渡された、という情報が移送されているというイメージの顕在性が高かったのかもしれない。

これは被験者が受信者の GB (Grounding behavior) をどのように理解したかという間に置き換えることができる。本実験刺激は、送信者からの伝達・受信者の傾き・受信者の回答、というシークエンスから構成されていた。この傾きは「伝達内容を理解した傾き」を意味するもの考えられる。しかしながら、言語伝達試行とみみうちジェスチャー試行において回答が大きく異なったことから、二つの試行において傾きの遂行的意味は異なっていたと考えられる。興味深いのは、本実験のようにターンの交替をたった一度しか含まず、しかも対象物の名前を発話するだけのシンプルな刺激に対し、伝達の方法を少し変化させただけで理解様式が大きく変化したこと、あるいは言語伝達試行でみられたように被験者によって解釈が広く幅を持ったことである。短い伝達やコミュニケーションに対し、幼児期から曖昧性を読み込み、多様な解釈を推論する能力が発達する姿の一端を記述した点も有意義であったと考える。

今後の展開としては、本刺激に対する解釈と帰属の関係をもっと踏み込んで記述する方向がありうる。たとえば先に考察したように受信者の傾きをどう理解したのかという観点からシークエンスの解釈を記述することができるだろう。Gardner (2001) は傾きの遂行的意味を、承認 *acknowledgement*、理解 *understanding*、継続 *continuer*、評価 *assessment* の 4 つに分類した。本刺激がどのような形式から理解されたのかこうした枠組みを参照しつつ調査し、理解の形式と原因帰属の関連、その発達的変化に注目して検討することは興味深い課題である。

本研究では、行為が本人の特性に必ずしも由来するものではなく、社会的な要因を原因とする可能性に 6 歳から気づきうる可能性を示唆した。行為の意味同定は様々な要因の影響を考慮する必要のある多元的な過程であり、同時に規範的な推論バイアスが介在する文化的な過程でもある。今後はラベリングなどの知識に関する帰属だけでなく、援助行動・加害行為などの道徳的な行為に関する判断等、

検討領域を拡大して幼児の行為理解の発達の起源と文化的変容を明らかにする必要があるだろう。

引用文献

- Birch, S. A. J., Vauthier, S. A., & Bloom, P. 2008 Three- and four year-olds spontaneously use others' past performance to guide their learning. *Cognition*, 107, 1018-1034.
- Bond, M. H., Leung, K. & Wan, K. C. 1982 The social impact of self-effecting attributions: The Chinese case. *Journal of Social Psychology*, 118, 157-166.
- Clark, H. H. 1996 *Using Language*. Cambridge University Press.
- Clark, H. H. & Brennan, S. E. 1991 Grounding in communication. In Resnicl, L. B., Levine, J. M. & Teasly, S. D. (Ed), *Perspectives on Socially shared cognition*. The American Psychological Association. 127-149.
- Einav, S., & Robinson, E. J. 2010 Children's sensitivity to error magnitude when evaluating informants. *Cognitive Development*, 25, 218-232.
- Einav, S., & Robinson, E. J. 2011 When Being Right Is Not Enough: Four- Year-Olds Distinguish Knowledgeable Informants From Merely Accurate Informants. *Psychological Science*, 22(10), 1250-1253.
- Gardner, R. 2001 *When Listener Talk*. John Benjamins.
- Gilbert, D. T. & Malone, P. S. 1995 The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, 117, 21-38.
- Jones, E. E. & davis, K. E. 1965 From acts to dispositions: The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, 2 New York: Academic Press. 219-266.
- Kashima, Y. & Triandis, H. C. 1986 The self-serving bias in attribution as coping strategy: a cross-cultural study. *Journal of Cros-Cultural Psychology*, 17, 83-97.
- Kelley, H. H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. Levine (ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*, 15. Lincoln: University of Nebraska Press. 192-238.
- Koenig, M. A., & Woodward, A. L. 2010 Sensitivity of 24-montholds to the prior inaccuracy of the source: Possible mechanisms. *Developmental Psychology*, 46, 815-826.
- Koenig, M. A., Clement, F., & Harris, P. L. 2004 Trust in testimony: Children's use of true and false statements. *Psychological Science*, 15, 694-698.
- Matthews, D., Lieven, E., Theakston, A., & Tomasello, M. 2006 The effect of perceptual availability and prior discourse on young children's referring expressions. *Applied Psycholinguistics*, 27, 403-422.
- Miller, D. T. & Loss, M. 1975 Self-serving biases in the attribution of causality: Fact or fiction? *Psychological Bulletin*, 82, 213-225.
- Nadig, A. S., & Sedivy, J. C. 2002 Evidence of perspective- taking constraints in children's on-line

- reference resolution. *Psychological Science*, 13, 329-336.
- ニクラス・ルーマン 1993 社会システム理論 (上) 恒星社厚生閣, 東京.
- Nilsen, E. S., & Graham, S. A. 2009 The relations between children's communicative perspective-taking and executive functioning. *Cognitive Psychology*, 58, 220-249.
- Nurmsoo, E., & Robinson, E. J. 2009 Children's trust in previously inaccurate informants who were well or poorly informed: When past errors can be excused. *Child Development*, 80, 23-27.
- O'Neill, D. K. 1996 Two-year old children's sensitivity to a parent's knowledge state when making requests. *Child Development*, 67, 659-677.
- Patterson, C. J., Cosgrove, J. M., & O'Brien, R. G. 1980 Non-verbal indicators of comprehension and noncomprehension in children. *Developmental Psychology*, 16, 38-48.
- Plumert, J. M. 1996 Young children's ability to detect ambiguity in descriptions of location. *Cognitive Development*, 11, 375-396.
- Revelle, G. L., Wellman, H. M., & Karabenick, J. D. 1985 Comprehension monitoring in preschool children. *Child Development*, 56, 654-663.
- Robinson, E. J., & Nurmsoo, E. 2009 When do children learn from unreliable speakers? *Cognitive Development*, 24, 16-22.
- Ross, L. 1977 The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 10. New York: Academic Press.
- スペルベル, D.・ウィルソン, D. 2000 関連性理論-伝達と認知 研究者出版, 東京.
- Strickland, L. H. 1958 Surveillance and trust. *Journal of Personality*, 26, 200-215.
- 高梨克也・瀬戸口久雄・坊農真弓・河原達也 2007 ポスター会話における発話の情報構造と基盤化の分析 人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-A702-06. 21-28.

